

戰時國民幼稚園

——(五)大國民の性格——

倉橋惣三

國民幼稚園の目的が國民自覺への根柢を培育するにあることは言ふまでもない。しかもその自覺は、假りにても、たゞ自己への凝視に止まり、狹隘な團結に偏するものであつてはならない。狭いものは小さいといふことある。皇國民は大國民でなければならぬ。況して、大東亞新秩序の指導者を以て任ずる、之れからの日本人として、狭い性格こそ禁物である。大國民的の性格の所有者でなければならぬ。

日本人は、その本來の素質に於ては、融和、寛容、ひろく、のびやかな性格である。之れは八紘一宇の大理想に於ても、文化渾成の歴史の事實に於ても、疑ひなきことである。しかしまた、海を以て他と隔離の位置にある地理性からも、武力闘争に劇しからざるを得なかつた國內事情からも、その本來の性格が伸びくゞ發展するさいふよりも、自己中心的狹隘性に傾き來るの嫌ひが無いではなかつた。明治日本は、その閉鎖性を開き放つて、活潑なる文化渾成のひろやかさを展開したが、時に受容のひろさに走つて、自主性を逸するの趣きが無いさは言へなかつた。閉づれば他を排し、開けば己を失ふは、往々にして陥る弊である。それが、自主抱容の大國民性を發揮し得る點に於て、實に今日の昭和日本の如きはないのである。

この時に當つて、兒童に眞の大國民の性格を啓培教養することは、國民教育の切なる必要であると共に、大いなる可能である。國民學校の本旨として、大國民への教育さいふこが強調せられてゐる。國民練成は大國民練成であることを忘れてはならぬさせられてゐる。その國民學校の基礎段階にある國民幼稚園の保育本旨が、亦此の點になければならぬことは、言を俟たないところである。

幼児期教育は、性格の基調の方向づけに於て有效させられ必須させられてゐるのであるが、その中でも、性格の廣狹の方向づけに對して、恐らく最も力強い影響を與へるものであらう。此の時期に狭く癖づけられた性格を、後に至つて廣いものに向け直すさうとすることは、不可能ではないにしても、非常に困難である。狭さは狭さを容易さとして、その方向に慣れるものである。さなきだに、屢々狭くならう狭くならうとする性格の偏りに對して、之れに廣さの方向を充分に與へることは、幼児期教育の、最も主要な任務でなければならぬ。而して、その爲の工夫は種々であらうが、保育者その人の性格が、大國民的でなければならぬことは、必須の先決である。